

現在の英語教育センターが語学教育研究所として誕生したのは1989年のことである。開設から数えて今年で10年になる。開設10年を記念した本誌の発刊をお祝い申し上げるとともに、英語教育センターの今日の発展を皆さんとともに慶びたいと思う。

英語教育センターの発展は、もちろん本学において英語教育の新たな発展を意味するものであると同時にFE（フレッシュマン・イングリッシュ）やAUAP（亜細亜大学アメリカプログラム）に代表されるように、それがそのまま大学の評価につながっているといっても決して過言ではない。この10年の間に成し遂げた本学発展の原動力であったとさえいえるほど、その果してきた役割と実績は極めて大きいものがある。

英語教育の改革、英語教育センターの開設、そして今日の発展にご尽力頂いた衛藤藩吉前学長をはじめ、歴代の所長、英語担当教員並びに客員教員の諸先生そして国際交流部などさまざまな形でご支援、ご協力を頂いた多くの関係者に深甚の謝意を表したいと思う。

10年前、本学は衛藤前学長の手で大学イメージと評価を一新するための抜本的な改革を断行したが、この時期は、いわゆる大学冬の時代を前提にした改革論議が盛んになり始めた頃である。しかし実際の改革が多くの大学で進展をみるのは、大学設置基準が改正された1991年以後のことである。

その意味では、本学の改革は他大学に先鞭をつける形になり、とりわけ英語教育の面で顕著な成果をあげ、大学関係者はもとより社会的にも大きな関心を集め、また高い評価を得るに至っている。FEとAUAPはまさに画期的な試みであった。今日類似のプログラムが多くの大学で導入されているが、10年を経た今日においても、他の追随を許さない内容と特徴を有している。このプログラムの恩恵を最も受けているのは学生であるが、ネイティブ・インストラクターとしてこれまで授業を担当してきた100名をこえる客員教員の熱意と指導方法も忘れることはできないであろう。

しかしながら、大学をとりまく状況は今日大きく変化し、また21世紀に向って大学に新たな役割が期待されており、さらなる改革が求められている。本学でも、目下2000年以降の新しい状況に対応した改革に取り組んでいるが、英語教育研究所から英語教育センターへの移行も、広く教育・研究組織再編の一環として行ったものである。従って、それは単なる名称変更に止るものではなく、英語教育の充実、発展、語学教育全体のさらなる改革につながることを期待したものである。

AUGP（Asia University Global Program）将来計画検討委員会がとりまとめた答申や、自己点検・自己評価報告書においても指摘され、提案されているように、現状に満足することなく絶えざる改革努力を続けていく必要があろう。

短期プログラムではあるが、AUGP（中国）やAUGP（インドネシア）もすでに実施の段階に入っている。AUAPも上級年次生への開放が決定し、学外への開放も実施の方向で検討が進んでいる。国際交流に係る委員会も実情に即して、今年の4月組織変更を行った。

将来に向けてやるべきことは多々残されている。少子化とユニバーサル化が進む中で個性化と多様化をはかりながら、大学としての特色と魅力ある授業を開発し、創造していくうえでも、また本学の建学以来の理念・目的に照しても、英語教育センターをこれまでの経験と成果をいかして、欧米系言語とアジア系言語を、それに日本語を加えるなど新たな構想のもとに総合的な語学教育センターに拡充、発展できればと考えている。

もちろん全学的な理解とコンセンサスが必要であるが、英語教育センター開設10年を契機に、本学における語学教育の新たな発展のスタートになることを期待したい。

(H10. 10. 1)